

人と社会の活性化を促すアートについて

～幼児教育現場での一事例

Art Stimulating Activation of Human and Society

- An Example of the Facing Places of the Early Childhood Education

下山肇

1. はじめに

本研究は、アートによって、人、社会がどのように活性化されるのか、ということについて“幼児教育の現場”で行われた研究と事例の報告である。

活性化とは辞書によると、「沈滞していた機能が活発に働くようになること。またそのようにすること。」⁽¹⁾とある。今回は、筆者の個展〈セカイヲ ヒラク キッカケ展～下山肇 造形展〉を題材に、“作家”“ギャラリー（幼稚園）”“技能者”“大学生”“保護者”など様々な世代がアートに関わりを持つことで、それぞれがどのように活性化されたのかを、より具体的に見いだしていこうと思う。

2. 背景

2-1. プロジェクトの舞台

本プロジェクトは 2012年3月5日（月）～25日（日）に茨城県竜ヶ崎市にある認定こども園 聖和学園 竜ヶ崎幼稚園にて開催された。この園は遊びや歌、アートを通してこどもを育成するというコンセプトに基づき運営され、幼稚園内にギャラリー“Kindergarten Museum”を併設したユニークな施設である。(Fig.1)

2003年より年に数回、各方面で活躍するアーティストに依頼して、さまざまな充実したプログラムを実践し、こどもの教育に活かしている。

第8回目となる今回は、ご縁があり、筆者が担当することとなった。

2-2. ワークショップとアートの関係

こどもを教育するうえで、同施設の用いている方法は、“ワークショップ”と呼んでもよいであろう。ワークショップとは「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者自らが参加・体験して共同で何かを学び合う／造り出す、新しい学びと創造のスタイル」⁽²⁾と定義されている。様々なテーマや手法がある中で、アート文脈としてみた場合でも、“つくって、さらして、ふりかえる”ことを繰り返す方法は、子どもたちの“概念を形にする”能力を引き出し、自己の世界を構築する力を生み出す、“創造力開発”と呼ばれるワークショップとして位置付けられると考える。

本プロジェクトは、園の方針と筆者の今までの活動が同調することでスムーズに進行していった。

3. コンセプト “世界を開くきっかけとなる表現の探求”

プロジェクトを始めるにあたり、幼稚園からは、1) 鑑賞者、参加者みんなが楽しめること、2) 卒園間近の5歳児、約40名が対象、3) これから小学校へ上がる意識を高めるため、ちょっと背伸びした内容、という三つの要望をいただいた。

プロジェクトのイメージをつかむために、園の先生方とディスカッションしていくなかで、卒園間近のこどもたちが最近、“積み木を使ってすばらしいものをつくるようになった”という話がでてきた。これは“無意味なものから意味を見いだす”という、先の“概念を形にする”力が育っているのではないかということとなり、このことをヒントに、本プロジェクトのコンセプトをたてることになった。“少し背伸びする”という意味を筆者の作品のなかから“図と地の反転”や“文字”に求め、それらをモチーフにした作品群をもとにして、コンセプトを参加者、鑑賞者が“世界を開くきっかけとなる表現の探求”と定め、進めることになった。

本プロジェクトの主たる企画展のタイトルも〈セカイヲ ヒラク キッカケ展～下山肇 造形展〉とし、コンセプトが分かりやすく伝わり、また園児にも読みやすいカタカナで表現することとした。

4. プロジェクトの概要

企画内容は例年通りのものとして、1) 展覧会、2) ギャラリートーク、の二つのプログラムと、新たな企画として、3) 保護者向けセミナー、4) 園児と作家が密に関わる協働での作品制作であるアートワークショップが行われることになった。

【日程】2012年

2月29日（水）10：00～11：30

保護者向けセミナー

〈ころころキラキラセミナー／

気楽なアートのススメ～セカイヲ ヒラク キッカケ展によせて〉

3月5日（月）～24（土）

企画展 〈セカイヲ ヒラク キッカケ展～下山肇 造形展〉

3月7日（水）10：30～16：00

アートワークショップ 〈そら・うみ・りくの動物たち〉

3月12日（月）ギャラリートーク

【場所】 認定こども園聖和学園 竜ヶ崎幼稚園 Kindergarten Museum

〒301-0843 茨城県竜ヶ崎市羽原町1366-3 TEL 0297 (62) 0573

5. コラボレーションの可能性

今回の機会を幼稚園と筆者との関係だけにとどめるのではなく、筆者を媒体に様々な関係をもっている人々に関わってもらうことによって、コンセプトに乗っ取った活動ができるのではないかと考えた。そこで教員として関わっている実践女子大学文学部美学美術史学科の学生たちや、昨年より地域活性化の一環として協働で動いている“高崎アート製造プロジェクト カロエ（以下カロエ）”などへも参加を打診し、アートの力を実感できる絶好の機会として協有してもらった事となった。

また一方で、学生たちにとっては、昨今ますます厳しくなっている“就職活動期の社会進出”のきっかけづくりとして、またカロエにとっては“異業種間交流の場作り”と“技能向上の場”として、それぞれなりの価値が見いだされ積極的にプロジェクトに関わってもらったこととなった。(Fig.2)

6. 保護者向けセミナー

園児と協働するうえでは、まずその保護者と企画のイメージを共有する必要がある。幼稚園からの“育児によって狭くなりがちな保護者の視点を広げるようなセミナー”という要望のもと、企画展のコンセプトとアートワークショップの内容が伝わるように、“ミツケル”をテーマとした約1時間のスライド上映と講義を行った。(Fig.3)

セミナー後の食事会の中では、「確かに昔はわたしもそうだった。」や、「うちの子が実は面白い事を言っていたのに聞き流していた、セミナーを聞いて大事な事だったと思い出した。」など、楽しい感想が数多く聞け、凝り固まりがちな思考を少しは解きほぐせたのではないだろうか。

以下にセミナー参加を呼びかけるために作成した挨拶文を付記する。

【セミナー挨拶文】

「世界は楽しさと美しさに満ちあふれ、そしていつでも私たちがその中へ招待しています。」

これは以前、あるアーティストの講演会で聞いた言葉で、今でも私の心に強く残っています。世界が元々楽しく美しいなら、退屈しないで幸せに暮らせそうです。

しかし、私たちはどのようにすれば、その“招待”に答えられるのでしょうか？

長年表現の世界に関わってきて、日々その“招待”に答えようと奔走し続けていますが、そのヒントは“ミツケル”力にあるのではないかと考えています。

思い返してみると、その力は子供の頃には自然と身に付いていたものでした。何気ないものでも“顔”に見えたり、“怪獣”に見えたり、いろいろなものを発見していく。これは“見立て”とって想像力によってものを発見する力です。特に日本人は得意といわれていますが、大人になるとこの力は忘れてしまいがちです。

今回の展覧会ではアートを手段にしながら、この“ミツケル”力を忘れないようにデザインした様々な作品と、作家と子供たちとのコラボレーションによって完成する新作を出

展します。

鑑賞していただいた方々や、ワークショップに参加してくれた子供たちの卒園後も、“楽しく、美しく”暮らすキカッケにしていただければ幸いに思います。

7. 企画展

7-1. 展示作品

今回のコンセプトに相応しい展示にするべく作品を選定した。あらたにデザインした新作〈ミツケルの樹〉を中心に、コンセプトを補完するよう過去に“感性と知性の融合”を目指して制作した、〈スカラベ1 / Scarab chair + screen #1 (2002年~)〉、〈コトバノミナモト / The Souce of Japanese (2008年)〉、〈コトバノハシラ〜「亡き人に」 / The Pillars of Japanese “Naki Hito Ni” (2011年)〉、〈おもいやりの柱 / Pillars of Compassion (PioRyo2008年)〉などを展示した。(Fig.4, 5)

7-2. 新作“ミツケルの樹”(Fig.6)

投影されたときに平面的に充填される立方体をベースに、ある角度から見たときにだけ、文字や絵が浮かび上がる仕組みを持った立体としてデザインした。バラバラな“部分”が、一つの絵に見えたとき、作品はパズルのピースがぴったりはまるような、秩序があらわれる時のワクワクする感じをあたえ、感性を刺激する知的な遊具となる。(Fig.7, 8)

立体の六面のうち、三面にはあらかじめ分割された“空・海・陸”の漢字を黒い建材カラーシートで貼っておき、各面の反対側に後のアートワークショップで制作される“空の動物、海の動物、陸の動物”の絵を配置できるように準備しておいた。

制作はカロエが請け負った。高さ2700mm、幅2200mm、奥行き2150mmのスチール製、オイルペイント仕上げ。重さは約200kgである。通常であれば一体物として制作されるところが、本ギャラリーの入り口が園児サイズで狭いために分割せざるを得ず、実施設計、製作ともに大変に工夫が必要であった。(Fig.9)

8. アートワークショップ (Fig.10)

8-1. 前提としての留意点

アートワークショップにありがちなことは、参加する事の意義や自由度を強調するあまり作品の質が確保できていない結果になるというものだ。しかし質の確保ため、キット化された見本通りにゴールを目指すのでは“うまい・へた”の意識や“やらされてる感”が出てきてしまい、結果的に本来のワークショップの意味を失ってしまう。このバランスをとりながら、参加者の満足度を高め、達成感を味わってもらうことが最も留意すべき点であり、今回もプログラムを開発、運営する上での前提とした。

8-2. 技法と素材

成果物としての作品が、あるクオリティをキープしつつオリジナリティにあふれているためには、手順や素材の“簡易性と自由度”のバランスが重要なポイントであると考えられる。今回は、1) 単純な行為として、小ピースを組み合わせて絵を作ることで、道具使いなど技術の必要性を無くした。2) また、一チーム15名程度でのグループワークによって、成果の質に個人差が出ないようにするとともに、共有の喜びを味わってもらうようにした。3) さらに素材に“建材用カラーシート”を使用することによって、素人でも容易に発色の良い表現ができるようにした。素材は古くからお世話になっている埼玉の看板業者から端材を分けていただいた。(Fig.11)

40名の園児を作家一人で相手にするには無理があるため、12~13名ずつ三チームにわかれ、各チームに3名ほど製作アシスタントとして大学生に着いてもらった。また、障害をもった園児のフォローのため、園の先生にも補佐していただいた。

8-3. テーマ

園児たちにとって身近なものをテーマにする事で、作品に親しみを持ってもらい、ワークショップに入りやすくしてもらおうと“動物”を取り上げた。作品と関わる事で、卒園間近の園児たちの能力が活かされ未来への力が開けるよう、作品中の面と面で文字と絵が必然的に繋がっていくという、すこし背伸びした関係性を意識できるよう用意した。

8-4. 実践

1) アイスブレイク

まずは自己紹介の後 (Fig.12)、アイスブレイクとして園児たちから、空、海、陸にはどんな動物がいるか意見を出してもらった。近い時期に遠足で動物園に行ったという事もあり、様々な動物の名前が具体的にあげられた。活発な意見が出てくる事で制作する気持ちが盛り上っていく。(Fig.13)

2) アイデアスケッチ

次に“空・海・陸”の各チームにわかれ、あらかじめグリッドを引いておいたA4サイズの紙に鉛筆で動物の姿をスケッチしてもらった (Fig.14)。その中から実際制作する絵柄について、誰かの絵を元にするのか、組み合わせて作るのかなど、五歳児なりの話し合いが行われた。“空”チームは〈白鳥〉、“海”チームは〈魚とクラゲと亀〉、“陸”チームは〈カンガルー〉に決まった。この段階は少し手間取るかと予想していたが、各チームともスムーズに決まった事には驚いた。これはこれまでの園による教育の賜物であろう。(Fig.15)

ここまでで午前中の制作は終了である。

3) 昼食と鑑賞

お昼ご飯はみんなでスケッチを鑑賞しながら食べた。スケッチが“スパイス”になって

話も弾み、みんな楽しそうに午後の制作への期待感を口にしていた。(Fig.16)

4) 配置

午後はいよいよ本制作の始まりである。後から分割できるように用意した1 m × 1 mの白いマグネットシートの上に、様々な大きさの矩形の建材シートを配置していく。建材シートはチームごとに“赤系・青系・緑系”にグループ化しておいた。これは色相をそろえる事で統一感を出し、作品の質を保証するためである。同系色相の絵は一見単調になりそうだが、〈ミツケルノキ〉に配置された後は位置がバラバラになるため、かえって引き立ってくるのである。

また、他チームの色が欲しいという要求が出てくると予想していたが、1 m × 1 mの絵は園児たちにはオーバースケールで、他チームの色にまで注意は払われなかった。

みんなで一枚の絵を制作することは大人でも難しい事であるが、園児は自然に役割分担ができ、話し合いを重ね丁寧に確認しながら、少しずつかたち作っていった。(Fig.17)

5) シート貼付け

最終的な位置が決まったらみんなでシートの裏地をはがし一斉に貼っていった。子供たちはシールが大好きである。(Fig.18)

最後に金銀の特別シートを一人一枚配り、此处ぞという場所に貼ってもらうことで制作は終了した。

6) 完成と鑑賞

その後場所を移して、お互いのチームの作品を発表、鑑賞しあった。ここで始めて絵が分割され“ミツケルノキ”の中に融合される事を発表するとみんな一瞬驚いたが、自分たちの作った絵が合わされる事によって作品が完成するという事に期待感が膨らんだ。(Fig.19, 20)

7) おわり

参加者みんなが多いに楽しんでくれ、ワークショップの締めくくりには園児からお礼として合唱がプレゼントされた。その純粋な歌声には、ワークショップを無事終えられた安堵感も手伝って、感動のあまり涙ぐむ大学生たちもいた。(Fig.21)

8) 作品融合

後日、筆者とカロエで分割した絵を対応する面へ配置し、〈ミツケルノキ〉は完成した。(Fig.22, 23)

9. ギャラリートーク

竜ヶ崎幼稚園には三歳、四歳、五歳の園児たちが通っている。時間を区切って年齢ごとにすべての子どもたちに対してギャラリートークを行った。小さな子供たちに作品の意味を伝えるのはとても難しいことだったが、“ミツケル”というキーワードを使いながら話していくと、それぞれの見方で生き生きと魅力を発見していった。(Fig.24, 25, 26) 中には筆者も気付かなかったような面白さを発見する子供もいた。

ギャラリートークの様子は地元紙“エリート情報”にも紹介され、展覧会の動員や園のピーアールにも繋がった。(Fig.27)

最終的に完成した〈ミツケルノツキ〉は、一見するとカラフルなチップが貼られた立方体の集合オブジェであるが、ある位置から見ると文字や絵が浮かび上がるという秘密が隠されている事を、参加した園児たちは知っている。展覧会期中、作品を始めて見る自分の親や、先生たちに対して「みつけられる？」と、目をキラキラと輝かせながら、誇らしげに作品解説をする子どもたちの姿は微笑ましくもあり、頼もしくもあった。

10. プロジェクトを終えて“それぞれの成果”

アートによって活性化がなされたかどうかについて客観的に提示することは非常に難しい。なぜならアートによって生まれる効果は、即、経済効果があがったり人や物の流れができるといった、可視化や数値化のできる尺度を超えたところに存在するからである。また同時に“活性化について”を本プロジェクトのみで判断することはできないが、関わった人たち、それぞれの意識がどう変化したかという事を本人たちのその後の言動を見る事で、その一面を推し量ることはできるだろう。

■ 竜ヶ崎幼稚園園長先生の場合

依頼していただいた竜ヶ崎幼稚園の園長先生からは、「今回、作家と園児が密に関わるアートワークショップを実践する事は、リスクも多かったが同時に多くの実りがあった。今後のこども教育の中で、アートの位置付けをもっと考えていきたい。」と、少し行き詰まりを感じていた“制作”からの教育にヒントを見いだしていただけた。

■ アートワークショップサポートの大学生たち

始めて経験するものが多かった大学生たちの参加後のレポートからは、「戸惑ってしまった。」「立ち尽くしてしまうことが多かった。」というマイナス意見もある中で、「園児達と共に達成感のようなものを味わうことができた。」「仲間の気持ちを大切にしながら共同で制作することの大切さを学んだ。」「教育実習に役立てようと思った。」「またこのような機会があれば、ぜひ参加したい。」など積極的な記述がみられ、得る物も多かったようである。

■ 高崎アート製造プロジェクト カロエ

また、カロエは、「普段のなれた仕事ではなく、やった事も無いような案件を受け、そこから難題が生じたときにどう解決するかというところに技術の向上がある。しかしその機会はなかなか自分たちでは見つけられない。アートや作品製作に関わる事で自分たちの未来を切り開くキッカケが作れるのではないか。今後も積極的に機会を作って活かしていきたい。」と語った。

2011年の研究報告“アートと地域活性化 ～伊香保アートプロジェクト2011”⁽³⁾のまとめで、カロエの山崎氏が企業向け活動報告の依頼を受けた旨、報告した。その後カロエとしての活動が地域の新聞“ぐんま経済新聞”にも取材され (Fig.28)、その縁で今

夏、ある企業からの依頼で、地域祭りへの企業参加に活用する“御神輿”のデザインと製作の発注を受けることができた。筆者を含むメンバーでのコラボレーションの末、10月5日、祭りの前日に無事納品することができた。この件についてはまた別の機会に報告したいと思う。(Fig.29)

このような、どこに発注してよいか分からない“付加価値”を作り出す受け皿としてカロエが存在していく事で、ゆくゆくは構成メンバーそれぞれの本業である製造業へも影響が表れ、上向きの力が働くのではないかと期待感が膨らむ。

11. まとめ “アートをとおしての活性化”

以上のように本プロジェクトの成果をまとめると、“懸案事項解決のヒントづくり”や、“子供のつぶやきに対しての気づき”、“見えなかった価値の発見と共有”、“未知の世界への開眼”と“新規事業開拓”など、関わった方々それぞれなりに「沈滞していた機能が活発に働く(後略)」⁽¹⁾ ことができたのではないだろうか。このことから“アートをとおしての活性化”の一面が垣間見えたように思う。

それは、“過去に気づく事”、“今を楽しむ事”、“未来への希望が作られる事”によって個人の活性化が成され、このような思いや体験を多くの人々が体感し、共感、共有の輪が広がっていく事によってまた、社会の活性化が実現される、ということである。この事をふまえ、筆者は今後も表現者、教育者として、高齢者や地域など様々な場面でこのような活動を続ける事で、さらなる“人と社会の活性化を促すアート”の可能性を追求していきたいと思う。

ひとまず展示の終わった〈ミツケルノツツミ〉は、筆者が以前から関わっている地域活性化プロジェクト“伊香保アートプロジェクト”とのコラボレーションを探るため、温泉旅館のロビーへ再度展示された。次なる機会は、そう遠くない未来に再び訪れることであろう。(Fig.30)

謝辞

本プロジェクトは以下の皆さんのご協力によって無事終了することができました。横尾哲生先生、藤原ゆみこ先生、飯塚拓也先生はじめ園の先生方、園児と保護者の皆さん、高崎アート製造プロジェクト カロエの山崎正臣氏、松本健氏、瀧澤真吾氏、武井和弘氏、松本慎悟氏、町田和紀氏、コマツアートデザイン株式会社 小松茂男氏、実践女子大学文学部美学美術史学科有志10名の皆さん、埼玉大学教育学部有志4名の皆さん、伊香保アートプロジェクト木暮美奈子氏はじめ皆様、織田涼子先生、高橋綾先生(順不同)

この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

[註]

(1) 新村 出 編「広辞苑 第四版」岩波書店 1994年 p.506

(2) 中野 民夫 著「ワークショップ-新しい学びと創造の場」岩波書店 2001年 p.11

(3) 「美學美術史學 第26号」実践女子大学 2012年 p.50

[参考資料・文献・URL]

新村 出 編「広辞苑 第四版」岩波書店 1994年

中野 民夫 著「ワークショップ-新しい学びと創造の場」岩波書店 2001年

林 容子・湖山 泰成 共著「進化するアートコミュニケーション」法政大学出版局 1987年

中西 紹一 編著, 松田 朋春, 紫牟田 伸子, 宮脇 靖典 共著「ワークショップ 偶然をデザインする技術」宣伝会議 2006年

セシル・バルモント 著「Cecil Balmond+a+u Special Issue」エー・アンド・ユー 2006年

ドナルド・A・ノーマン著「エモーショナル・デザイン-微笑を誘うモノたちのために」新曜社 2004年

ブルーノ ムナーリ 著「ファンタジア」みすず書房 2006年

岩井 俊雄 著「いわいさんちへようこそ！」紀伊國屋書店 2006年

「美學美術史學 第26号」実践女子大学 2012年

「認定こども園 聖和学園 HP」 <http://ryugasaki-k.ed.jp/ry/>



Fig.6 「ミツケルの樹」



Fig.1 KinderGarten Museum



Fig.2 プロジェクト概念図



Fig.3 保護者向けレクチャー「気楽なアートのススメ～セカイヲ ヒラク キッカケ展によせて」



Fig.4 「セカイヲ ヒラク キッカケ展」会場風景 1



Fig.5 「セカイヲ ヒラク キッカケ展」会場風景 2

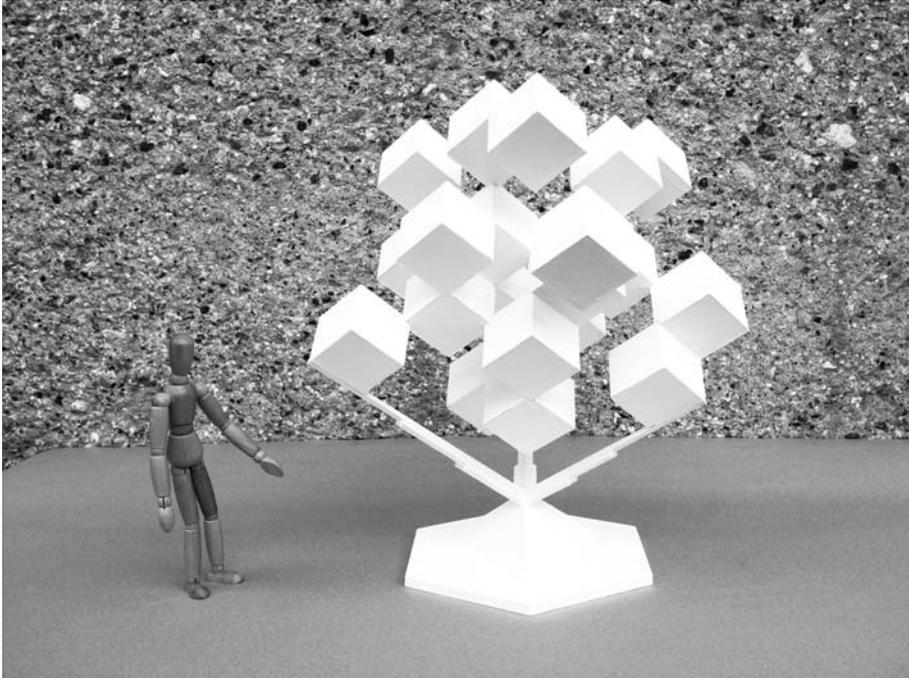


Fig.7 「ミツケルの樹」 S =1/10 モデル

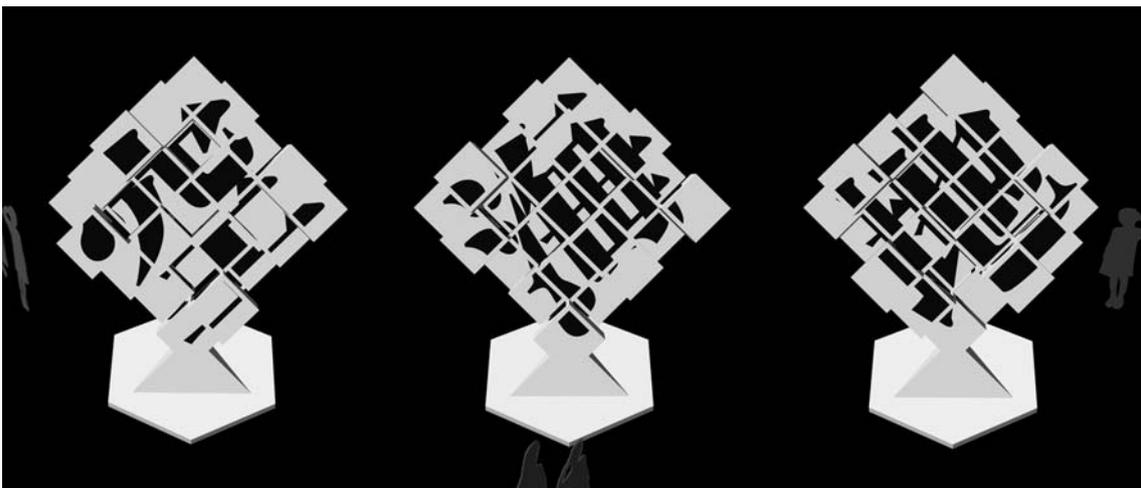


Fig.8 ある方向から見ると浮かび上がる文字



Fig.9 カロエの制作



Fig.10 アートワークショップ「そら・うみ・りくの動物たち」制作風景



Fig.11 素材・カラー建材シート



Fig.12 自己紹介



Fig.13 アイスブレイク「動物の名前」



Fig.14 イメージスケッチを描く

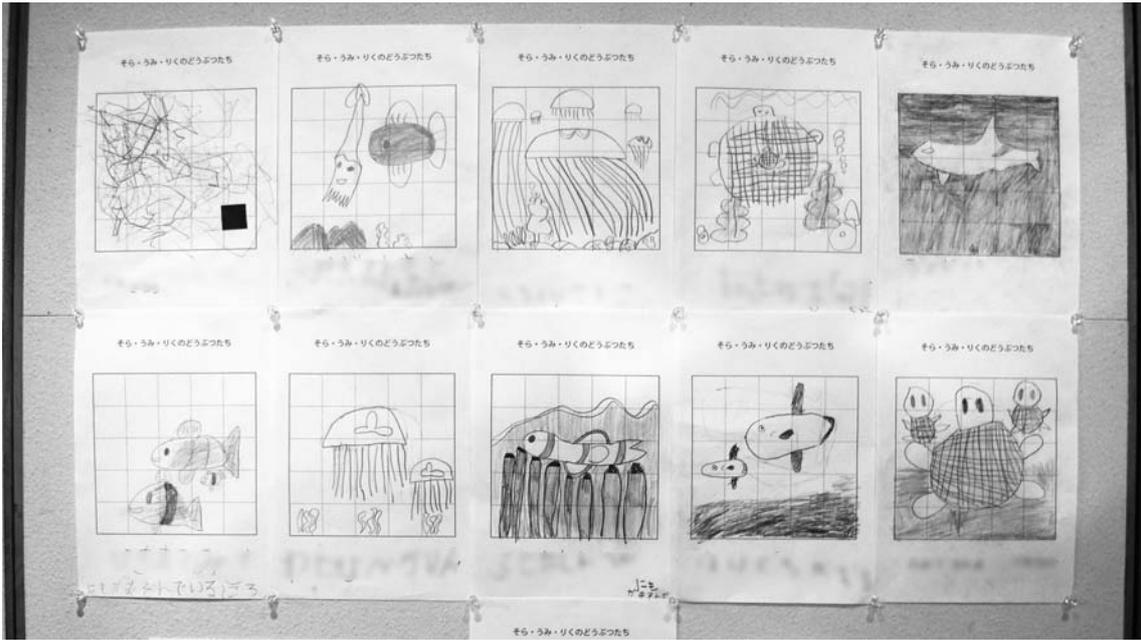


Fig.15 イメージスケッチの例 「うみの動物」



Fig.16 スケッチを囲んで昼食



Fig.17 スケッチをもとに配置



Fig.18 裏をはがして貼っていく



Fig.19 みんなで鑑賞



Fig.20 完成作品「空=白鳥」「海=さかな、かめ、くらげ」「陸=ぴよガルー（ひよこ+カンガルー!）」



Fig.21 合唱のプレゼント



Fig.22 配置用に解体



Fig.23 各面へ配置



Fig.28 ぐんま経済新聞 2012,4,12 9面



Fig.29 依頼されたデザイン神輿



Fig.30 伊香保温泉旅館ロビーでの展示